

グラフィックデザイン作品整備業務研修にかかる報告書

大阪中之島美術館準備室 外部研修生

赤道春瀬

はじめに

本研修では大阪中之島美術館が所蔵する近現代グラフィック作品の調査および保管にかかる実務を行った。研修中は特に、大阪出身のグラフィックデザイナーである早川良雄（1917-2009）の作品を多く取り扱った。私が本研修への参加を希望した理由は、現在グラフィックデザインの研究をしており、また学芸員の職にも興味があるためである。本研修を通してグラフィックデザインや学芸員の職への理解を深めたいと考えた。

研修日程

2019年7月29日（月）、8月1日（木）、8月5日（月）、8月6日（火）、8月7日（水）

研修内容

第1日目：7月29日（月）

グラフィックデザイン資料の収蔵について講義を受けた。グラフィックデザインの定義、その歴史、印刷方法についてや、グラフィックデザインを美術館で収蔵することの意義などについて学んだ。

第2日目：8月1日（木）

早川良雄のグラフィックデザイン資料の数を2人一組で数えた。手順としては、2人で別々に10枚ずつ数え、10枚目の位置が合致するか確認した。10枚目の位置が2人の間で異なっていれば、必ず合致するまで数えた。数が合えば10枚目と11枚目の間に付箋をはさみ、再度同じ作業を繰り返した。すべて数え終えたのち、全体の数を集計した。その際もダブルチェックを行い、合計枚数に関して2人の回答が異なっていれば、必ず合致するまでやり直した。以上のような作業を何セットか行った。

第3日目：8月5日（月）

まず梱包作業について学んだ。梱包は作品を輸送するときに必要な作業である。そのため、輸送の時のことを考えて注意すべき点はいくつかある。輸送時に重要なことはまず、作品がぐらぐらせずしっかりと固定されていることである。額装された作品が箱のなかでぐらぐらする場合には、小さく切った緩衝材を額と箱の間に入れる。こうすることで固定される。さらに、紙でできた作品を輸送する際には天地が逆にならないように注意しなければならない。紙には伸び縮みがあり、波打ちしてしまう可能性がある。そのため、保存額装については、額の中で波打ちがおこらないように上だけ留め、下は留めないようにしている。天地

を逆にしてしまうとそれが意味をなさなくなってしまうので注意が必要である。梱包について学んだあとは、実際に梱包作業を行った。

その後、収蔵資材の製作を行った。紙でできたポスターはその性質ゆえに、年数とともに自然と中央に向かって反ってきてしまう。それを抑えるために用いるのがこの収蔵資材である。製作手順としてはまずアーカイバルボードを幅 7cm 程度で棒状にカッターで切る。そして作品に触れても悪影響を与えないよう、薄葉紙で包む。このようにして収蔵資材が出来上がる。

第4日目：8月6日（火）

午前はまず、収蔵品と収蔵品リストを照らし合わせる作業を行った。これはリストに記載されている作品が実際にあるかどうかを確認するための作業である。作品の裏面に番号が記載されており、それをリストの番号と照合する。この作業は2人一組で行った。一方が作品裏の番号を読み上げ、もう一方はそれがリストにあるかどうか確認し、あればチェックをつけた。このチェックの際、反りかけている作品が発見されたため、第3日目に制作した収蔵資材で端を抑えた。

その後収蔵品を用いてコンディションチェックを行った。コンディションチェックの際には適宜ライトを用いて、折れ、破れ、波打ち、欠損、汚れ、補彩といった点から作品の状態をチェックし、専用の紙に記載していく。これらにはそれぞれ1折れ、2破れ、……、6補彩と番号が振られている。紙に記載する際にはこの番号、またはそれを表す記号を用いる。これらに当てはまらない重要な情報は、文字で書く。たとえば「和紙で裏打ちされている」といった情報や、茶色く変色していることを表す「茶変」といった情報がそれにあたる。コンディションチェックは、他館と作品を貸し借りする際に行う作業である。このときに作品状態をきちんとチェックしていなければ、貸し出し時からあった異常なのか貸し出し後に発生したものなのか分からなくなってしまい、館同士の信用にも関わる。そのため、コンディションチェックは重要な作業である。

午後は、早川良雄の制作した作品の数を数えた。作品を大中小に分類し、4人で分担して数を数えた。数え終わったあとそれらを適量に分け、梱包作業を行った。



【図】 整理する前の早川良雄資料

第5日目：8月7日（水）

午前は早川良雄作品の整理作業を引き続き行った。終了後、ポスターの情報を書き出しリスト化する作業を行った。手順は以下である。まず通し番号をつける。その後、リストの記入者名、作品のサイズ、タイトル、特徴、制作年を記載する。タイトルの欄には、ポスターの場合その作品のなかで最も目立つ文字を抜き出し、タイトルとして記載する。特徴としては、あとから読んでリストに載っている作品と実際の作品が合致していると判断できるようなものを書く。たとえば女性が描かれているポスターであれば、女性の服や持ち物を特徴として記載する。このような情報は、以下に記載する写真撮影の際にも重要になる。

リストを記載した後は、写真撮影を行った。写真撮影はつぎのような手順で行う。まず、リストに記載してある作品とこれから撮影する作品が同一のものであるかを確認する。その際リストに書かれているポスターの特徴を見て確認を行う。つぎに通し番号が書かれた紙とともに撮影する。通し番号を書いた紙が作品とともに写っていなければ、後から写真を見返したときにどの作品を撮ったものなのか分からなくなってしまうため、必ず確認する。さらに写真撮影の際には、作品中の文字がしっかりと写るようにピントを合わせる事が重要である。今回写真撮影を行った作品はポスター作品であり、展覧会の会期や主催など文字情報が豊富に記載されていた。そのため、文字がきちんと写るように撮影することは重要であった。撮影の際にはほかに注意することは、作品が見切れないようにすること、影が入らないようにすること、なるべく水平に写るようにすることである。

午後は業者の方々が作品梱包作業を行っているところを見学した。業者の方々は、作品の長さを測り、それに合わせて段ボールをカットし梱包の材料としていた。作品はまず薄葉紙で包まれ、その後茶紙、段ボールの順で梱包される。それがひもで縛られ梱包が完成したのち、作品名などの情報が書かれたシールが段ボールに貼られる。この作業の見学後は早川良雄作品を数える作業を行った。その後、それらを梱包した。

研修を通して

今回の研修を通して学んだことは、学芸業務の大変さとその魅力、グラフィック作品を美術館で収蔵することの意義である。

第一に学芸業務の大変さは、今回学芸業務の一部を実際に行うなかで身をもって実感した。たとえば資料の数を数える作業は単純な作業のように思えるが、資料の数が多いのでかなり苦勞した。大阪中之島美術館には膨大な数の資料が保管されているため、資料を数えることも大変な作業であることが想像される。同じく、第4日目に行ったリストに載っている資料が実際にあるかどうか確認する作業も量が多くなるとかなり大変な作業であると思われる。学芸員の業務は地道な作業も多いのだと感じた。さらに今回の研修では実際に資料を扱うことも多く、大変緊張した。学芸員の方々は常にこのような緊張感や責任感を持って作品を扱っているのだと感じた。しかしながら、実際に作品を扱うことには喜びもあった。特に嬉しかったことは、早川良雄作品を扱うなかで、図録でしか見たことのなかった作品を

間近で見ることができたことだ。エディションナンバーが記載されていることも確認することができて、感動した。学芸業務は大変ではあるが、作品を間近で見ることができるというのはやはり魅力のひとつであると感じた。

第二に、グラフィック作品を美術館で収蔵することの意義についてお話を聞いたことは大変勉強になった。初日の講義のなかで最も印象的だったのは、近現代の社会の人々はポスターのようなグラフィック作品から大きな影響を受けているということである。たとえばわれわれはポスターやチラシなどのグラフィックデザインを日々大量に目にする。グラフィックデザインはわれわれの視覚文化の大半を占めている。したがって、グラフィックデザインを研究することは文化を研究することにつながる。研究するためには、資料が必要である。ここに美術館でグラフィック作品を収蔵することの意義が見出せる。

大阪中之島美術館にはグラフィック作品が豊富に収蔵されているため、グラフィックデザイン研究の基盤となるような美術館となることが予想される。美術館が開館すれば、グラフィックデザインに関する展覧会も多く開かれることになるであろう。展覧会が開催されれば、図録も制作される。それらの図録をもとに、グラフィックデザインに関する研究がさらに発展することが期待される。大阪中之島美術館が開館することによって、グラフィックデザイン研究はより盛んになるのではないだろうか。さらに大阪中之島美術館には、吉原治良など関西出身の画家の作品も多数収蔵されている。これらの作品と同時代・同地域のグラフィックデザインとを合わせて展示することも可能であろう。両者を比較して、双方の影響関係を考察することもできるのではないだろうか。様々な観点からグラフィックデザインの研究が行われることが予想される。開館を心待ちにするとともに、グラフィックデザイン研究のさらなる発展を期待している。